

介護関連の仕事で大学や専門学校で学費を賄う「介護奨学生」制度がじわりと注目を集めている。「学費を稼ぐだけでなく、超高齢化社会の中で活躍する人材を育てたい」と新聞奨学生の経験がある男性が起業。2015年春から「ミライ塾」の名称で学生を受け入れ、介護事業者との仲介役を果たす。初年度は1人だった奨学生は現在11人。評判を聞きつけた高校生からの資料請求は本年度は200件を超える。目指す本業に加え、介護のスキルも身に付けて自身の付加価値を高めたという若者を中心に、着実に浸透し始めている。

「夢を実現するためにも、高齢者介護の現場経験は絶対に役立つはず」。ホスピタリティリズム専門学校(東京都中野区)の夜間部に通う松木瑛さん(19)は川崎市宮前区IIが力を込める。

16年春、ミライ塾の「塾生」となり、専門学校に進学した。年間70万円ほどの学費はミライ塾に紹介された市内の高齢者施設での給与を中心に支払う。福祉系の高校に通っていた松木さんは、福世系の高校に通っていたこともあり施設での仕事に抵抗感はなかったが、介護の道に進むことは考えていない。目指すのはホテル業界のプロだ。「東京五輪パラリンピックに向け、外国人や障害者、高齢者がホテルを利用する機会も増えるはず。「介護のプロ」として働ければ多様な人に応対できると思う」。現在は週5回、日中7時間ほど施設で就労。担当する入浴介助では1人30分ほど高齢者と向き合っており、対話する時間があるといい、「奨学生として夢に向かって頑張っているのを知ってく

壁をこわす

文・草山歩

卒業後は不動産コンサルティング会社に就職。転機は介護関連の案件を扱ったことだった。高齢化や人手不足なく介護業界の実態を知り、新聞やテレビ、街中でも高齢者福祉が気になるようになった。「これからの時代、高齢者を支える仕組みがとれた方がいいのか」。考えた末、

「ミライ塾を主宰する奥平幹也さん(43)は沖縄県出身。早稲田大学に進学したが、4人きょうだいで学費を出すがまだ少ない。難しかったため、新聞奨学生となった。

新聞配達そのものはそれほど苦ではなかったが、友人や先生などから「新聞奨学生」や「草山歩」という目で見られるのが本意だった。新聞配達の仕事は楽しかった。ただ、単に学費のためだけに働くのではなく、「仕事を通して、みんなが持っている強みを身に付けられている」と堂々と発言できる職種であったならば周囲の反応も違つたらうと感じていた。

注目の「介護奨学生」制度

多分野の目標に活用

新聞奨学生だった自分の姿がふと頭に浮かんだ。

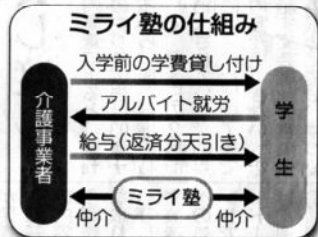
若者のレヴェルを貼られていた学生時代。もし自分の力で社会の役に立つことができたらいい。それに、若い世代が学費を理由に進学を諦めて貧困に陥ることがないようサポートすることは、長い目で見れば年金制度の維持など経済的にも高齢化社会を支えることにもつながるはずだとも考えた。

「介護業界で奨学生制度を始めよう」

不動産コンサルティング会社を退社し、12年に介護情報関連の会社を起業。同社事業の一つとしてミライ塾を手掛けている。

現在は首都圏限定で塾生となる学生を募集し、多くの場合で在学中に完済できる比較的短期の貸し付け型奨学金の形を取っている。

学生は制度の利用を希望する時期の前年度に申し込み、ミライ塾が紹介する介護事業者と面談の上、実際に就労を体験。この時に意志や適性を確認し、「覚悟がある場合に限り塾生として



受け入れている」(奥平さん)。

入学前に選考を済ませておくことで、入学金や学費の一部などを貸し付けが円滑に進められるメリットがある。

学生は入学後、早朝や夜間など働きやすい時間帯や曜日を選んでアルバイトとして就労。事業者が貸し付けた学費は毎月の給与から天引きして返済する。多い場合は20万円近い月収が得られるため、在学中に返済を終わらせ、貯金もできるといふ。

学生同士が悩みを相談し合えるよう、懇親会や会員制交流サイト(SNS)での交流もある。奥平さんも個人として学生の精神面のサポートを行っており、



◎ミライ塾を運営する奥平さん(東京都内)後勤で施設内を清掃する根本さん(東京都内、奥平さん提供)

スマートフォンには直接「単位を落とさずしてしまっとうしよう」「寝坊してしまう」といった細かい悩みも届くという。

根本紘志さん(26)は同市中原区IIは都内の高齢者施設で週1~2回の夜勤をこなしながら、東京大学大学院に通う。高校生くらいの子どものようなことを考えて勉強しているのか分析する教育心理分野の研究者を自指す中、「例えば施設で利用者の歩行をサポートする際、あえて待たせたり気遣ったりする。その姿勢は教育とも共通している。仕事から学ぶことも多い」。家庭教師のアルバイト経験もあるが、「無条件に歓迎されやすい子とも相手の仕事と違い、介護現場ではうわべだけの対応は通用しない。それが勉強になる」だけなく、介護人材の教育現場にも自分の研究を役立てられたいとも考えるようになった。

システムエンジニア、ラジオ業界、英語教諭…。制度開始から3年目で卒業生はまだいないものの、学生は多分野の目標を持っており、将来の夢についてアンケートを取っても「介護」は今のところ皆無だ。

奥平さんは「そういう人材にこそ、ミライ塾を利用してほしい」と語る。今後の高齢化社会で活躍できるよう、学校で専攻するプロフェッショナルな分野と、介護という二重の専門性を持って社会に出て活躍してほしいと願う。「介護の現場には、主体性や粘り強さ、コミュニケーション能力を身に付けられる場面が詰まっている。ミライ塾出身者には、社会で胸を張って自分の価値を生かしてもらいたい」

「論説・特報」へのご意見、ご感想をお寄せください

ファクス=045(227)0153=か電子メール=houdo@kanagawa-np.co.jp=で神奈川新聞報道部まで。